

貧者はどこに座るのか

——ヤコブ書 2 章 3 節の解釈をめぐって——

辻 学

序. 問題設定

「我が兄弟たちよ、栄光の、我らの主イエス・キリストへの信仰を、(人の) 分け隔てをしつつ持ってはならない。」(ヤコブ 2:1)

ヤコブ書の著者は、この戒めに続けて、教会内における「分け隔て」の例を挙げている。

「というのは、もし、君たちの集会に、金の指輪をして派手な服を着た人が入ってきたが、また、汚れた服を着た貧しい人も入ってきたとして」(2:2)

教会の礼拝に、対照的な服装の二人が入ってくる。二人はおそらく教会のメンバーであろう²。すると、派手な服を着た方の人に目を留めたある教会員が、

- 1 R. B. Ward, *Partiality in the Assembly: James 2:2-4*, *HThR* 62 (1969) 87-97 は、2:2-3 の場面を、原始キリスト教における裁判集会の描写と考えるが、正しくない。これについては、S. S. Laws, *A Commentary on the Epistle of St. James* (BNTC), London 1980, 101f. および Chr. Burchard, *Gemeinde in stroherner Epistel. Mutmaßungen über Jakobus*, in: D. Lührmann/ G. Strecker (Hg.), *Kirche* (FS G. Bornkamm), Tübingen 1980, 315-328: 322f. の批判を参照。また、「集會」(συναγωγή) は、キリスト教の礼拝集會を意味する。ヘルマス「戒め」XI. 9, 同13f.; エスティノス「対話」63, 5; エウセビオス『教会史』VII. 9, 2; II. 11f. 参照。ここでは、ユダヤ教のシナゴグが意味されているのではない。この問題については、拙著 *Glaube zwischen Vollkommenheit und Verweltlichung* (WUNT 2/93), Tübingen 1997, 136 Anm. 9 参照。したがって、ユダヤ教シナゴグの構造について詳細に論じている L. Rost, *Archäologische Bemerkungen zu einer Stelle des Jakobusbriefes* (Jak. 2, 2 f.), *Palästinajahrbuch* 29 (1935) 53-66 は、我々の箇所解釈にはあまり役立たない。
- 2 この二人が教会員であるかどうかについて、研究者の意見は分かれるが、続く 4 節で、「君たちは、自分たちの内で差別した」と言われているゆえに、二人は教会のメンバーだと考えるのが適切であろう。より詳しくは、前掲拙著、136-137 頁参照。

早速声をかける——「あなたはこちらの良い席にお座り下さい」（3節前半）。

問題は、汚れた服の貧しい教会員に向けられている言葉（3節後半）である。ネストレ版に従って訳すと次のようになる。「貧しい人には、『あなたはあちらに立つか、あるいは私の足台の下端に³座りなさい』と言ったとしたら」。

この箇所をめぐる問題は二つある。一つは、この箇所の読みが、写本によって食い違っていることである。しかも、1997年に出版された *Editio Critica Maior* においては、ネストレ版と異なる読みが本文に採用されている⁴。元来の読みは、どの写本が提供しているものだろうか。もう一つは、「足台の下端」という表現が何を意味しているのかということである。教会の座席に設けられた「足台」とは何だろうか。そして、その「下端」に座るとはどういうことだろうか。本論文では、この二つの問題を検討してみたい。

1. 本文批評の問題

この貧しい人に対して示された場所はどこか。写本証言は以下のように分かれている⁵。

1. 「あちらに」立つことを要求するもの

1.1 座る場所は「足台の下端」

1.1.1 「あなたはあちらに立つか、私の足台の下端に座りなさい」（ネストレ版の読み）

3 新共同訳「わたしの足もと」は、「足台」という語をきちんと訳出していないので不適切。

4 Institut für neutestamentliche Textforschung (Hg.), *Novum Testamentum Graecum. Editio Critica Maior*, IV/1 Jakobusbrief, Teil 1: Text, Stuttgart 1997. *Editio Critica Maior* がネストレ版の読みから離れているのは、この 2:3 と 1:22 (*ἀκροαταὶ μόνον*) の 2 箇所。ただし我々の箇所では、*Editio Critica Maior* は、ネストレ版の読みにも同等の価値があるとしている。

5 *ὑπό* + 対格は、“*unten an*” を意味する。Bauer–Aland, Sp. 1680f. 参照。

6 以下の表は、*Editio Critica Maior*, 27頁を基にしている。ただし、写本番号の表記は、ネストレ版のものを用いた。なお、 Φ^{23} の読みを、ネストレ版は *ὄν στήτι ἐκεῖ ἢ καθὼν ὡδε*（以下なし）としているが、*Editio Critica Maior* は、*ἢ* か *καὶ* か不明としている。

σὺ στήθι ἐκεῖ ἢ κάθου ὑπὸ τὸ ὑποπόδιόν μου 81 996 1359 1661 Cyr

1.1.2 「あなたはあちらに立つか、私の足の足台の下端に座りなさい」

σὺ στήθι ἐκεῖ ἢ κάθου ὑπὸ τὸ ὑποπόδιον τῶν ποδῶν μου A vg

1.1.3 「あなたはあちらに立ち、そして私の足台の下端に座りなさい」

σὺ στήθι ἐκεῖ καὶ κάθου ὑπὸ τὸ ὑποπόδιόν μου C*

1.2 座る場所は「足台の上」

1.2.1 「あなたはあちらに立つか、私の足台の上に座りなさい」

σὺ στήθι ἐκεῖ ἢ κάθου ἐπὶ τὸ ὑποπόδιόν μου 206 218 429 522 614 630 1292

1448* 1505 1611 1718 1799 1890 2138 2200 2421 2495 sa

1.2.2 「あなたはあちらに立つか、私の足の足台の上に座りなさい」

σὺ στήθι ἐκεῖ ἢ κάθου ἐπὶ τὸ ὑποπόδιον τῶν ποδῶν μου 33 vg^{ms}

1.2.3 「あなたはあちらに立つか、足台の上に座りなさい」

σὺ στήθι ἐκεῖ ἢ κάθου ἐπὶ τὸ ὑποπόδιον Ψ

1.3 座る場所は「ここ」

1.3.1 「あなたはあちらに立つか、ここで私の足台の下端に座りなさい」

σὺ στήθι ἐκεῖ ἢ κάθου ὠδε ὑπὸ τὸ ὑποπόδιόν μου 𐤍 5 69 88 pt

1.3.2 「あなたはあちらに立つか、ここで私の足台の上に座りなさい」

σὺ στήθι ἐκεῖ ἢ κάθου ὠδε ἐπὶ τὸ ὑποπόδιόν μου P 322 323 621 pc

1.3.3 「あなたはあちらに立ち、そしてここで私の足台の下端に座りなさい」

σὺ στήθι ἐκεῖ καὶ κάθου ὠδε ὑπο τὸ ὑποπόδιόν μου C²

2. 「立つか、あちらに座るか」を要求するもの

2.1 「あなたは立つか、あちらで私の足台の下端に座りなさい」(Editio Critica Maior の読み)

σὺ στήθι ἢ κάθου ἐκεῖ ὑπὸ τὸ ὑποπόδιόν μου B* 1241 1243 2298 2492 ff

2.2 「あなたは立つか、あちらで私の足台の上に座りなさい」

οὐ στήθι ἢ κάθου ἐκεῖ ἐπὶ τὸ ὑποπόδιόν μου B² 945 1175 1739 1852 sa

このように並べると煩雑なようだが、「あちら」(ἐκεῖ)が「座りなさい」の前に付くのか後ろに付くのかという区別と、貧者の座る場所が、足台の「下」か「上」かという区別とをひとまとめに扱うことによって(ネストレ版や Editio Critica Maior では、両者は別々に取り扱われている)、問題の所在がより明らかになってくる。

前掲の表は、この箇所を読みがいかに混乱しているかを示すと同時に、どの読みがどの読みの改変なのかを系統立てて表すものである。

1のグループでは、写本間で読みの相違が激しい。ἐκεῖの位置(στήθιの直後か κάθου(直後か))についてだけ考えれば、前者を支持するこのグループには、シナイ写本(B)やアレクサンドリア写本(A)、エフラエム写本(C)といった有力な写本の支持が揃っている。しかしながら、そのいずれもが、文の後半部分で異なる読みを示しているのである。ネストレ版が採用している読み(1.1.1)を文全体として支持している写本証拠は、アレクサンドリア型の新しい層に属する小文字写本81があるとはいえ、全体に弱い。

しかしながら、「より難しい読み」(lectio difficilior)の原則に従うならば、1.1.1の読みは、1のグループに属する全ての異読に対して優位に立つ。他の異読は皆、1.1.1をよりわかりやすく書き換える試みと考えるからである。

1.2は、足台の「下」に座るという意味がわかりにくいので、「上」と改変したものだし、1.3は、「あちらに立つ」との対照を明瞭にするために「ここに座る」と書き足したに違いない。1.1.2(および1.2.2)は、「私の足の足台」という表現を用いているが、これは、Editio Critica Maiorのアпаратゥスで指摘されているように、七十人訳のイザヤ66:1および詩篇109:1に影響されたものである⁷。したがって、1のグループで一番優先されるべき読みはやはり、有

7 それに対して、Editio Critica Maiorの採用する読み(2.1)には、ヴェチカン写本(B)の支持がある。おそらくこのゆえに、Editio Critica Maiorにおいてはネストレ版と違う読みが採用されたのではないかと想像される。

8 イザ66:1: οὕτως λέγει κύριος ὁ οὐρανός μοι θρόνος ἢ δὲ γῆ ὑποπόδιον τῶν ποδῶν μου, 詩109:1LXX κάθου ἐκ δεξιῶν μου ἕως ἂν θῶ τοὺς ἐχθρούς σου ὑποπόδιον τῶν ποδῶν σου.

力写本の支持という点では1.1.1などに比べて劣るけれども、ネストレ版の支持する1.1.1ということになる⁹。1.1.1は、シナイ写本以前に遡る古い読みを保持していると考えられよう。

2のグループは判断が容易である。「足台の下端」と読む2.1が一番優先される (Editio Critica Maior の採用する読み)。1と違って2のグループでは、写本間で読みが大きく分かれていない。ここでは、ヴァチカン写本 (B*) の示す読みが古いと見て間違いない。

それでは、1.1.1と2.1のいずれが元来の読みだろうか。

問題は、どちらが「より難しい読み」かということにある。その際、直前の箇所 (3節前半) で金持ちに対して、「こちらの良い席にお座り下さい」(ὁ καθὼς ὠδε καλῶς) と言われていることに留意する必要がある。この言葉との対照が、我々の箇所では明らかに意識されているからである。

B. Metzgerによれば、「足台の下端」は、「あちらに立ちなさい」と示されている場所よりも話し手の近くと考えられている。しかしヴァチカン写本および他の幾つかの写本証言はこのことを理解せず、(金持ちには)「こちらにお座りください」、(貧者には)「あちらに立つか座るかしなさい」という二つの対照を作り出したという¹⁰。

けれども、逆方向に考えることもできる。元来は、両者の座る場所が対照に置かれていたのに (金持ちは「こちら」に座り、貧者は「あちら」に座る)、話し手の「足台」が「あちら」にあるというのは不自然な感じがするので、「あちら」を「立ちなさい」にかかるように改変した、という説明も可能だからである。2.1の読みを支持する J. H. Ropes は、「こちらに座って下さい」と「あちらに立ちなさい」との対照をはっきりさせるために1.1.1の読みが作られたと主張している¹¹。我々には、この蓋然性の方が高いように思われる。話し手の足台

9 1.1.3および1.3.3は、*π*の代りに *καί* を入れたものだが、この改変は意味がよくわからない。これは、エフラエム写本が支持する読みだが、こちらが元の読みであるとは考えられない。

10 B. Metzger, *A Textual Commentary on the Greek New Testament*, Corrected Edition, London/ New York 1975, 680f. R. P. Martin, *James* (WBC 48), Waco, TX 1988, 57も同意見。

11 J. H. Ropes, *A Critical and Exegetical Commentary on the Epistle of St. James* (ICC), Edinburgh 1916, 191. この読みを支持している註解者は、Ropes以外に見当たらない。

が、話し手のすぐそばにあったとは限らないし (Metzger に反対)、元来「座りなさい」の直後にあった「あちら」という語が、金持ちに対する「こちらにお座りください」という言葉に影響されて、前に移動し、「あちらに立ちなさい」となったという方が、改変の操作としては考えやすいからである。

したがって、ヴァチカン写本の支持があることをも併せて考慮するならば、我々としては、2.1の読みが元来のものである可能性に傾くが、いずれの側にも決定的な論拠はない。Editio Critica Maior のように、両方の読みに同程度の価値があることを示すのが無難であり、かつ必要でもあろう。

II. 「私の足台」

ὑποπόδιον という語は、七十人訳で 4 回 (詩98 : 5、109 : 1、イザ66 : 1、哀 2 : 1)、新約では 7 回用いられている (マタ 5 : 35、ルカ 20 : 43、使徒 2 : 35、7 : 49、ヘブ 1 : 13、10 : 13、ヤコ 2 : 3)。基本的には、椅子に座るときに足を置く台のことである。

この語には、七十人訳より古い用例が見られない¹²。その故に、この語はユダヤ教徒による造語かもしれないという説がかつて出されたことがあるが¹³、後述のように、ルキアノスやアテナイオスといった聖書外文献に用例が見出される以上、当時すでに用いられていた語を七十人訳の訳者たちが用いたと考える方が正しい¹⁴。

ルキアノスに見られる用例は、オリンピアのゼウス像に付随した足台を指してこの語を用いたものである¹⁵。また、アテナイオスは次のように述べている

12 ホメロスにおいては、*θρόνος* という語が用いられている (Il. xiv. 240; Od. xix. 57)。足台の具体的な形状などについて、G. M. A. Richter, *Ancient Furniture. A History of Greek, Etruscan and Roman Furniture*, Oxford 1926, 72-75. 136 (図版あり) を参照。

13 G. B. Winer, *Grammatik des neutestamentlichen Sprachidioms*, bearb. von W. Schmiedel, I. Theil : Einleitung und Formenlehre, Göttingen ⁸1894, 23.

14 A. Deißmann, *Neue Bibelstudien. Sprachgeschichtliche Beiträge, zumeist aus den Papyri und Inschriften, zur Erklärung des Neuen Testaments*, Marburg 1897, 50がすでにこのことを指摘している。

15 Conscr. hist. 27 (hg. H. Homeyer, München 1965, S. 130).

——「王座 (*θρόνος*) それ自体は、高貴なる (人の) 椅子 (*καθέδρα*) のことで、*θρήνυς* と彼らが呼ぶ足台 (*ὕποπόδιον*) がついており……」¹⁶。これらの例において *ὕποπόδιον* は、神ないし高貴な人間が足を置く台を意味している。

七十人訳においても *ὕποπόδιον* は同様に、王ないし支配者が足を置く足台を意味している。イスラエルの神は天を王座 (*θρόνος*) とし、地をその足台 (*ὕποπόδιον*) とする (イザ66:1。使徒7:49、バルナバ16:2 はイザヤ書の引用。マタ5:35もこの箇所を暗示)。エルサレムの神殿も神の足台に喩えられている (詩98:5、哀2:1)。また、詩109(110):1 でもこの語は、支配者の座に付随する足台という意味で用いられている——「主は我が主に言われた、私が、あなたの敵をあなたの足の足台として置くまで、私の右側に座すがよい」(ルカ20:43、使徒2:35、ヘブ1:13、10:13、バルナバ12:10、1クレメンツ36:5 はこの箇所の引用ないし示唆)。

このように、聖書外文献および七十人訳、そして初期キリスト教文書における *ὕποπόδιον* の用例は、そのほとんどが、王 (としての神) の座る王座に付随する足台を指している。上述 I の写本証言の中で、「私の足の足台」という読みを示しているものは (1.1.2と1.2.2および2.2)、これらの用例に影響されているわけである。

しかしながら、ヤコ2:3の *ὕποπόδιον* にこの意味合いを直接読みこむのは難しい。問題となっている舞台は、教会の集会であって、王や高貴な人間、ましてや神が足を置く「足台」がここで意味されているとは考えられないからである。

もっとも、足台 (*ὕποπόδιον*) は、神や王、高貴な人間が足を置くもの、ないし王座に付随するものとは限らない。一般の住居でも、足台 (*ὕποπόδιον*) 付きの椅子が用いられていたことを示す文献も見出されるからである。Tebtunis Papyrus 45 (前113年) では、ある農民の家から盗まれた家財道具のリストに「足台」が含まれている (P. Tebt 45, 38)¹⁷。また、Corpus Papyrorum Raineri

16 Deipnosophistae V. 192 e (LCL, ed. Ch. B. Gulick, p. 372).

17 B. P. Grenfell et al. (ed.), *The Tebtunis Papyri*. Part I, London/ New York 1902, 150-152.

I. 22.8およびI. 27.11 (いずれも後2世紀) では、婚姻の際に花嫁が持参する家具の一つとして「足台付きの椅子」(*καθέδρα σὺν ὑποποδίῳ*) が挙げられている¹⁸。

我々の箇所においては、王座が問題となっているとは考えられないゆえに、この、一般住居における足台が意味されているに違いない。この意味で*ὑποπόδιον* が用いられているのは、旧新約を通じて、我々の箇所だけである。

そうだとすると、ここから直ちに想定できるのは、礼拝を目的とするこの集まりが、ユダヤ教のシナゴグのような場所ではなく、一般の住居を用いて開かれていたということである。シナゴグの中に、参加者が座するための足台つき椅子(当然、ベンチのような形ではなく、一人用)が置かれていたとは考えにくい。これは、比較的裕福な教会員が自宅を集会場として提供することで成り立っていた「家の教会」を背景としているに違いない¹⁹。

足台が付属する椅子は、上等な椅子であろう。金持ちと貧者に席案内をした人は、そのような椅子に座っていたわけである。金持ちは、おそらくそのような椅子にかけよう案内されたのに違いない。「こちらの良い席に(*καλῶς*)お座りください」という言い方は、そのことを暗示している²⁰。

これは想像に過ぎないが、もしかすると話し手は、自分の座っていた良い椅子を、この金持ちに譲ったのかもしれない。これは、金持ちに媚びる態度の例としてプルタルコスが挙げている振舞いに一致する(Moralia 58 C-D)²¹。この想像が当たっているとしたら、貧者に指示した「私の足台」は、金持ちに譲る席

18 Deißmann, 前掲書50頁による(残念ながら、CPRを直接参照することが出来なかった)。

19 M. Dibelius, *Der Brief des Jakobus*, bearb. von H. Greeven, hg. von F. Hahn (KEK XV), Göttingen ¹²⁽⁼⁶⁾1984, 165は、教会の集会においてそのような個々に独立した椅子が用いられたとは信じ難いと述べているが、礼拝が「家の教会」で行われていると考えれば、そのような椅子に参加者(の一部)が腰掛けたことは充分にありえよう。

20 もっとも、Ropes, 前掲書190頁によれば、この*καλῶς*は、「どうぞ」という程の意味でしかないという。しかし、この*καλῶς*はやはり、貧者に対するひどい扱いとの対照を意識して用いられていると考えるべきであろう。

21 L. T. Johnson, *The Letter of James* (AB 37A), New York 1995, 223の指摘による。

と同様「こちら」にあることになり、この場合は、貧者に対して「あちらに座る」ことを要求する読み（ヴァチカン写本ほか。前述の2のグループ）は元来のものでないという結論になる。

もちろん、金持ちに勧めている椅子と、話し手自身の椅子とは別で、場所も離れていたとも想像できよう。この場合は、「あちらに座りなさい」という読みも可能になる。

いずれにしても、金持ちに対しては、（おそらく足台も付いていたであろう）上等で、座り心地の良い椅子をあてがい、貧者に対しては、座ることそのものを許さないか、あるいは、上等な椅子の足台の（上に座ることすら許さず）下端に、すなわち地べたに座れと命じるという、両極端な扱いがここでは、批判を込めて描き出されているのである。

Ⅲ. 文脈上の機能

我々の箇所は、聖書の中でὕποπόδιονが、一般の住居における足台の意味で用いられている唯一の例だと先に述べたが、実は、旧約（七十人訳）における上述の用例と全く無関係なわけではない。この箇所が、上述の詩109(110):1「あなたの敵をあなたの足の足台とする」との連想で読まれたであろうことは、初期キリスト教文書においてこの句が頻繁に引用・参照されていること（ルカ20:43、使徒2:35、ヘブ1:13、10:13、バルナバ12:10、Iクレメンズ36:5）、そして写本証言の中に見られる「私の足の足台の下端に」という異読（Iで挙げた中の1.1.2および1.2.2のグループ）からも窺われる。足台の上にならず、足台の下端に座る貧者は、まさに足台と同じ扱いを受けていることになる。それは、神の敵対者に等しい扱いであり、この上もない屈辱と感じられたに違いない。

このイメージは、続く2:5-7とのつながりで、このような差別がいかに反神的行為であるかを、読者に対して強烈に印象づける修辭的効果も持っている。

「聴け、我が愛する兄弟たちよ、神は、この世の（判断によれば）貧しい者たちを選び出して、信仰に富める者たちとし、また、（神が）自分を愛する人々に

約束した王国の継承者とされたのではなかったか」(2:5)。

神は、貧しい者たちをこそ選び出して、来たるべき終末の時に、約束の御国を受け継ぐ者とされる。そのことを読者は知っているはずである(「ではなかったか」という問いは、肯定の答を予期している)。おそらくこのような伝承が、初期キリスト教の中に広まっていたのであろう(1コリ1:26-31、マタ5:3-5 並行参照²²)。

神によって選ばれたはずの人々が、足台のごとき扱いを教会で受けている。足台のように扱われるべきは本来——詩109(110):1が語るように——神と神に選ばれた人々に敵対する存在のはずである。

足台のごとく扱われるべきは、神に反した行いをする者であって、それは、ヤコブ書の著者にとっては、富者に他ならないのである——「富める者たちこそが君たちを虐げ、彼らこそが君たちを裁判へと引っ張っていくのではないか。彼らこそが、君たちの上に唱えられた良き名を冒瀆しているのではないか」(2:6-7。富者の没落を語る5:1-6も参照)。

だとすれば、教会の集会に入ってきた両者に対する扱いは、むしろ逆でなければならない。しかし教会の人々は、富者に良い席を勧め、貧者に対しては、足台の下端に座るよう命じた。それがいかに、神の意思に反する行為であるかを、足台の下端に座る貧者のイメージは強烈に訴えている。これは、旧約の言葉を援用した、著者による神学的な教会批判の言葉なのである。

結論

1. ヤコ2:3後半の、貧しい教会員に向けられた言葉は、ネストレ版が採用している写本の読み(「あなたはあちらに立つか、あるいは私の足台の下端に座りなさい」)よりも、Editio Critica Maiorが採用している読み(「あなたは立つか、あちらで私の足台の下端に座りなさい」)の方が元来の読みである可能性が高いように思われる。しかしながら、決定的な論拠はないので、双方の読みを

22 より詳しくは、拙稿「ヤコブ書を読む5」、『福音と世界』1999年5月号、当該箇所註解を参照されたい。

(註などによって) 併記する必要がある。

2. *ὑποπόδιον* という語は、七十人訳（および、新約・使徒教父におけるその引用）においては、神や王ないし高貴な人間が足を置く台、ないし王座に付随する足台という意味で用いられているが、ヤコ 2:3 においては、一般の住居に置かれていた椅子に付随する足台を指している。このような足台付きの椅子が用いられていたということは、教会の集会在が、ユダヤ教のシナゴグのような場所ではなく、普通の家を会場としていた（=家の教会）ことを示唆している。金持ちの教会員には、足台がついている上等で心地良い椅子に座るよう促し、貧しい教会員に対しては逆に、離れたところで立つか、座るなら足台の下端にでも座るよう命じるという極めて対照的な扱いがここでは描き出されている。

3. この箇所は、*ὑποπόδιον* という語のゆえに、詩109(110):1「あなたの敵をあなたの足台とする」を連想させる効果を持っている。本来ならば、神に敵対する者として「足台」にされるべき富者が、足台付きの上等な椅子に腰掛け、御国の継承者として神に選ばれたはずの貧者が、足台のごとき扱いを受ける。上記の詩篇の言葉に通じていたであろう読者にとっては、2:3の描く情景が、いかに反神的なものであるかが一層強く印象づけられる仕掛けになっているのである。ここには極めて神学的な教会批判が込められている。